

天涯の地で出会った故郷の蜀の花、海棠。しかし、その地では。目を留める人もいない。黄州に流された蘇軾自身と重ね合わせながら、愛おしむ。中国名詩選（下）三〇三頁

寓居定惠院之東雜花滿山有海棠一株土人不知貴也（二〇八〇年）

定惠院じょうえいゐんの東に寓居し、雑花山に満つ、海棠一株有り、土人貴きを知らざるなり

江城地瘴蕃草木

江城地は瘴しょうにして草木蕃しげる

只有名花苦幽獨

只だ名花有りて苦はなはだ幽獨

嫣然一笑竹籬閒

嫣然えんぜんとして一笑す竹籬の間

桃李漫山總麤俗

桃李山に漫はひいりて総すべて麤俗そぞく

也知造物有深意

也また知る造物に深意有りて

故遣佳人在空谷

故こに佳人をして空谷に在らしむるを

自然富貴出天姿

自然の富貴天姿てんしを出しいだ

不待金盤薦華屋

金盤きんぱんもて華屋かおくに薦すすむるを待たず

朱唇得酒暈生臉

朱唇しゅしん酒を得て暈かき臉れんに生じ

翠袖卷紗紅映肉

翠袖すいしゆう紗を巻きて紅肉くれなゐに映ず

林深霧暗曉光遲

林深く霧暗くして曉光きやうこう遅し

日暖風輕春睡足

日暖かく風輕くして春睡足る

雨中有淚亦淒愴

雨中涙有りて亦た淒愴せいそう

月下無人更清淑

月下人無くして更に清淑

先生食飽無一事

先生食飽しよくあきて一事無く

散步逍遙自捫腹

散步逍遙して自らみずかを腹を捫さする

不問人家與僧舍

人家と僧舎とを問わず

拄杖敲門看修竹

杖を拄たえ門を敲たたき修竹を見る

忽逢絕艷照衰朽

忽ち絶艷すいきゆうの衰朽を照らすに逢い

歎息無言揩病目
陋邦何處得此花
無乃好事移西蜀
寸根千里不易致
銜子飛來定鴻鵠
天涯流落俱可念
為飲一樽歌此曲
明朝酒醒還獨來
雪落紛紛那忍觸

歎息して言無く病目を揩こす
陋邦ろうほう何れの処にか此の花を得ん
乃ち好事こうざの西蜀より移す無からんや
寸根すんこん千里致すに易やすからず
子しを銜ふくみて飛び来たるは定めて鴻鵠こうこくならん
天涯に流落す俱ともに念おもう可し
為に一樽を飲みて此の曲きょくを歌わん
明朝酒醒めて還また独り来れば
雪落つること紛々ふんぶん那ぞ触るるに忍びん

海棠

元豊六年（一〇八三年三月）

蘇東坡一〇〇選石川忠久より抄出

（中国名詩選（下）川合康三 三一七頁にも記載）

東風嫋嫋泛崇光
香霧空濛月轉廊
只恐夜深花睡去
故燒高燭照紅粧

東風とうふう嫋じょう嫋じょうとして崇光すうこう泛ゆぐ
香霧かうむ空濛くうもうとして月廊げつらうに転まず
只ただ恐る夜深よこくして花はなの睡ねむり去さらんことを
故ゆに高燭こうしやくを燒もやして紅粧こうしやくを照あらさん

【通釈】春風がそよそよ吹いてきて、星影がまたたき、花の香りがこもった夜霧はぼんやりかすみ、おぼろ月がひさしに傾く。夜が更けて海棠の花が眠ってしまうのが心配だ。とくに高くともし火を燃やして、紅をさした海棠の化粧姿を照らすとしよう。

東坡が寓居した定惠院の東の山に一株の海棠があり、その木を東坡はことのほか愛した。故郷の蜀は海棠の花の名所で、海棠溪と言う溪谷もあったという。結句の「紅粧(紅をさした化粧)には故郷に寄せるひとかたならぬ作者の思いが伺えよう。」

